

# 野山の花

— 身近な山野草の食効・薬効 —

城西大学薬学部 白瀧 義明 (SHIRATAKI Yoshiaki)

## トチバニンジン *Panax japonicus* C. A. Meyer (ウコギ科 Araliaceae)

初夏、奥武蔵の山を歩いているとうっそうと茂った木々の下で小さな白色の花をつけ、トチノキの葉に似た掌状複葉の草本を見かけます。これがトチバニンジンです。本植物は北海道、本州、四国、九州の山地、林中に自生する多年生草本で、花柄が分岐することがあり、分岐した側柄につく花は雄花として機能します。

薬用植物として有名なオタネニンジン *Panax ginseng* C. A. Meyer とは同じ *Panax* 属で、地上部は非常に良く似ていますが、オタネニンジンの果実が扁球形であるのに対し、本植物は、ほぼ球形です。時に球形の熟した果実に黒色の斑点のあるものがあり、これはマメ科のトウアズキの種子、「相思子」に似ているので、特に相思子様人参といいますが、薬効に違いがあるかどうかは、ハッキリしません。トチバニンジンの地下部はオタネニンジンの地下部とは著しく異なり、根茎は竹節状で横に長くのび、根は長いひげ根だけを生じ肥厚しません。また、これらのニンジン種子は、トチバニンジンが米粒状なのに対してオタネニンジンでは二枚貝のような形をしています。トチバニンジンの根茎をチクセツニンジン(竹節人参, *Panacis Japonici Rhizoma*) とよび、健胃、去たん、解熱薬として胃熱を去り、胃つかえ、消化不良、食欲不振、気管支炎などに使用されます。また、生薬ニンジンの代用とされることもありますが、強壯、強精の目的では代用にならないといわれています。主要成分はオレアナン系サポニンの *chikusetsusaponin IV* (チクセツサポニン IV) などで、味を比較するとオタネニンジンに比べて、トチバニンジンでは苦みが強いそうです。



写真1 トチバニンジン (花)

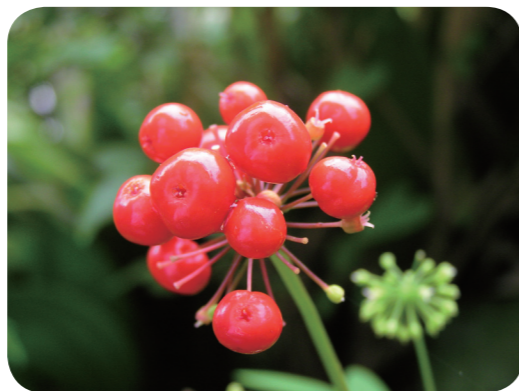


写真2 トチバニンジン (果実)



写真3 トチバニンジン (相思子様人参)



写真4 オタネニンジン (果実)



写真5 生薬:チクセツニンジン (左), 生薬:ニンジン (右)



写真6 トチバニンジン種子 (左), オタネニンジン種子 (右)

一方、薬草園で最も有名な薬草の一つであるオタネニンジンには、国内での栽培は昔から試みられていたものの、なかなか上手いかず、江戸時代中期、8

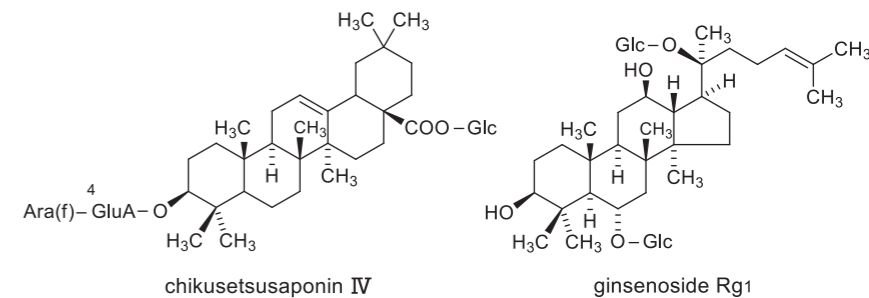


図1 *chikusetsusaponin IV*, *ginsenoside Rg1* の構造式

代將軍吉宗の頃になり、ようやく栽培に成功し、幕府は栽培を奨励するため種子を各藩に分与しました。これが、本植物がオタネニンジン(御種人参)とよばれるようになった由縁です。オタネニンジンには中国東北部、朝鮮半島原産で、別名をチョウセンニンジン(朝鮮人参)、コウライニンジン(高麗人参)といい、日本では長野県の上田市周辺、島根県大根島、福島県若松付近に産します。葉の辺縁にはきょ歯があり、6~7月ごろ茎頂の葉の間から10~20cmの細長い花軸を直立し、その先に1個の散形花序をつけます。果実は赤く熟し扁球形で多数集合したようにみえます。根茎は短く、根はその下に白色多肉の太い直根となり、いくつかに分枝し、3~4年目の秋、根を採り乾燥したものをニンジン(人参, *Ginseng Radix*)とよび、強壯、強精薬として賞用されます。最も有名な成分としてはダマラン系サポニンの *ginsenoside Rg1* (ギンセノシド *Rg1*) が知られています。